ケータイ・ダイエット

EICHAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ケータイ・ダイエット

【Ｎコード】
Ｎ２６３５Ｅ

【作者名】
ＥＩＣＨＡＮ

【あらすじ】
体重にコンプレックスを持っている真砂子に届いた一通のケータイメール。『ようこそ、ケータイ・ダイエットへ……会員である貴方は、いくら食べても太りません』その言葉通りに徐々にスマートになっていく真砂子。みんなの人気者になったのだが……

「ねえねえ、真砂子もカラオケ行こうよ」
めずらしく秋子が真砂子を誘ってきた。
「え？行ってもいいんですか？」
「いいに決まってるジャン。営業課の男子も４人来るわよ」
相川真砂子と岸本秋子は同じ職場の同僚である。
（きっとまた何か企んでいるのかしら）
真砂子は一瞬そう思ったが、気を取り直し返事をした。
「私でよければ、ぜひ」
「よっしゃ、決まりね。じゃ、仕事終わったらね」
秋子は不気味な笑みを浮かべ、自分の席に戻っていった。
（そうだ、今の私は変わったんだ。今までの私じゃないんだ）
真砂子は心の中でそうつぶやいた。

――それは、一ヶ月前の事……

真砂子はコンプレックスを持っていた。
良く言えばぽっちゃりしている。
悪く言えば太っている。
身長１５０ｃｍ、体重６５ｋｇ。
「別に気にする事ないって」
「何処が太ってるのよ」
そう言ってくれる同僚も中にはいるが、慰めにしか聞こえない。
会社の中の大半が自分の事を嫌っていると真砂子は思っていた。
「ねえねえ、今から営業課の男の子達とカラオケ行くんだけど、一緒に行かない？」
岸本秋子だ。
一緒にいるのは、営業課の高橋修二。

（高橋さん……）
真砂子は高橋に好意を持っていたが、嫌われてると思って話をした事がない。
「相川さんも行かない？」
高橋が声を掛けてきた。
（え、私を誘ってるの？……う、うれしい……）
「ダメダメ、この子は……一緒に行ってもつまんないわよ」
秋子が割って入ってきた。
真砂子は、秋子の態度にも特に怒りは感じない。
（本当に一緒に行っても盛り上げる自信なんて無いし……）
（高橋さんといたら多分、ただうつむいているだけ）
「あ、私は……あの……用事あるし……」
（あー、自分で何言ってるかわかんない。高橋さんと話なんかできないわ）
「そうかぁ？」
高橋は、ちょっと残念そうな顔で言った。
「さあさあ、早く行きましょうよ……」
秋子は高橋の手を引っ張って、他の女子と一緒に部屋を出て行った。
庶務課にぽつんと一人残る真砂子。
（これが私の日常……）
真砂子は特に悲しむ様子も無く、帰り支度を始めた。
『ピピピ……ピピピ……』
（メール？　また迷惑メールかなぁ……）
真砂子はケータイを開いた。
『完全無料！　必ず痩せるケータイ・ダイエット……興味のある方はココをクリック』
（何これ？　新手のワンクリック詐欺？）
（完全無料ってのがあやしいじゃん）
いつもの真砂子ならすぐに削除するのだが、なぜか気になった。

（ワンクリック詐欺なら、お金払わなくても何もして来ないって聞いたことあるし……）
（まぁ、いいか……）
真砂子はメールに書かれてるリンクをクリックした。
『会員登録ありがとうございます』
（何これ？　まじで詐欺？）
『ようこそ、ケータイ・ダイエットへ』
『会員である貴方は、いくら食べても太りません』
『貴方は太りませんが、下に描かれている女の子のおなかがどんどん大きくなります』
『会員である貴方は、毎日深夜０時までに女の子のおなかを必ずクリックして下さい』
『クリックを忘れた時点で解約とさせて頂きます』
『その際に貴方が受けた被害につきましては、当方は一切責任を負いません』
（解約って何？　被害って……）
真砂子は一瞬、身の毛もよだつ恐怖に襲われた。
真砂子が更にスクロールをすると漫画チックな女の子が描かれており、その下に書かれた最後の文字に全身が凍りついた。
『相川真砂子　様』
（私を知ってる人のいたずら？）
（まさか、秋子の仕業？）
真砂子は冷静になって考えた。
（こんないたずら、ある程度の知識があれば誰でもできるじゃん）
真砂子はあまり深く考えないように家路を急いだ。

「相川さん、最近痩せたよね？」
「うんうん、可愛くなったよ～」
人とはこれほど変わるものかと真砂子は思った。
今まで話もしてくれなかった同僚達も真砂子の周りに集まってき

た。
「ねえ、どんなダイエットしてるのよ」
「私にも教えて～」
「あはは、ちょっとね……」
とても本当の事なんか言えるわけがない。
でも、こういうのも悪い気はしない。
（これなら私も変われそうかな）
思えば、あのメールが来た日から、真砂子は食べても全く胃に溜まらなくなった。
正確に言えば、喉を通過した時点で食べ物が消えてしまうのである。
何処かブラックホールにでも飛んで行っているような感覚である。
ケータイの女の子のおなかは本当に膨らんでおり、午前０時前におなかをクリックすればまた元に戻る。
しかし、全く胃に何も入らなければ飢死してしまうのであるが、クリックしてから午前０時までに食べた分に関しては胃に入っていくのである。
真砂子は徐々にコツをつかんで、必要最小限の食事を午前０時前に摂れるようになった。

――そして、メールが着信してから一ヶ月が経ち……

昼休み、いつものように真砂子の周りに同僚の女の子が集まっている。
一人取り残された岸本秋子は面白くない。
（絶対になにか秘密があるはず……一ヶ月でこんなに痩せるわけないでしょ……）
（全身整形かなんかしてるに違いないわ……）
秋子は、一人更衣室に入り真砂子のロッカーをそっと開けてみる。
（鍵が掛かってないわ……無用心ね……）

秋子は真砂子のバッグを探ってみる。
（ケータイ？……バカねあの子……）
早速ケータイのメールをチェックする秋子。
（ケータイ・ダイエット？……何これ？）
じっとケータイを見つめる秋子。
（午前０時……これだわ……）
秋子は不気味な笑いを浮かべてケータイをそっとバッグの中に戻した。

（なんだろう？この感覚は……）
真砂子は胃に違和感を覚えた。
カラオケボックスの中、庶務課の女子４人と営業課の男子４人で盛り上がっている。
いつもならいくら食べても喉を過ぎれば消えてなくなるはずが、胃に普通に溜まっているのである。
（おかしいなぁ……まだクリックしてないし……）
（ケータイ忘れてないよね……）
真砂子はバッグのケータイを確認する。
（ケータイはあるし、０時前にクリックすればいいはず……）
「何、下ばっかり気にしてるの？」
高橋が真砂子に声を掛けてきた。
「相川さん……だよね？」
「はい！」
（わあ、高橋さんだ、どうしよう……ドキドキ……）
「なんか見違えちゃったなぁ……」
高橋は、真砂子の顔をまじまじと見つめている。
（きゃあ～、何しゃべればいいのさぁ～）
「だけど、俺的には前のほうが可愛いと思うんだけどなぁ……」
（が～ん、ショックじゃん……でも喋るきっかけが出来ただけでも、あのメールに感謝！）

「まあ、そんな事より、一緒にデュエットしよ！」
「はい！」

（今、何時頃だろう、普段お酒なんか回らないのに今日はなぜか酔っ払うなぁ～）
真砂子はケータイの時計を確認する。
（げ！　もう１１時５０分……やばい）
「ちょっと……トイレに……」
その時、秋子が声を掛けてきた。
「そいえば、真砂子。メアド交換してなかったわね」
「そうだっけ？……」
真砂子は気が気ではない。
「私のケータイに空メール送るからちょっとケータイ貸して」
「ちょっと、今は……」
真砂子の言葉を無視して勝手にバックからケータイを取り出す秋子。
「あ、ごめ～ん、手が滑った～」
秋子はわざとらしくケータイを落とし、足で思いっきり蹴った。
ケータイはソファーの奥に入り込む。
真砂子は一瞬血の気が引いた。
「私のケータイ、私のケータイ……」
真砂子は必死にソファーの下を探すが、暗くてよく見えない。
（さあ、どうなる真砂子）
秋子は自分の時計を覗き込み、笑みを浮かべながらつぶやく。
（あと１０秒……９……８……７……）
ソファーの下、ケータイの女の子のおなかがどんどん膨らんでいく。
「私のケータイ何処よ！」
真砂子は半狂乱で泣きながら叫んだ。
秋子は笑いを堪えながら時計を見つめる。

（3……2……1……0）
ケータイの女の子のおなかが弾けた。
『プチッ』

「きゃ～～～～」
「わぁ～～～～」
部屋一面が血の海になり、壁や天井までが真っ赤に染まっており、肉片や内臓のかけらが部屋中に飛び散っている。

（私は死んだの……？）
（部屋中真っ赤だ……）
（これは私の血……？）
（私の体はバラバラになったの……？）
（やっぱりね……最初からそう思ってたんだ……）
（世の中そんなうまい話なんてないよね……）
（あのメールを開いた時から、こうなる運命だったんだ……）

「相川さん！しっかりするんだ！」
（高橋さん？……死んでも夢、見るのかな……？）
「相川さん！　真砂子さん！　大丈夫か！」
高橋は血まみれで倒れている真砂子を抱き起こした。
高橋も全身血まみれである。
「あたし……生きてる……？」
真砂子は自分の手足を確認する。
血まみれではあるが、別に怪我をしてる様子もない。
「じゃ、この血の海は……？」
「岸本さんだよ……突然体が破裂したんだ……」
高橋は、今起きたことが信じられないという様子で答えた。
真砂子はソファーの下を覗き込んだ。
光っている物がある。

（私のケータイだ……）
真砂子は高橋にお願いしてケータイを取ってもらう。
ケータイを開く真砂子。
（登録画面だ……）
真砂子は下までスクロールして愕然とした。
『岸本秋子　様』
（秋子……私のケータイを勝手に？）
（勝手にメールを開いて会員登録したの？）
（じゃ、私の登録は上書きされたって事？）
（今日は食べ物が喉から消えなかったのは、これが理由？）
（本当なら私が……）
真砂子は呆然とその場に立ち尽くした。

――そして、一ヶ月後……

「真砂子さん！　待った？」
高橋が笑顔で走ってくる。
「ううん。全然」
真砂子は笑顔でそう答えた。
（体重は戻ったけど、高橋さんと付き合えるようになったし……）
（秋子には悪いけど、私にとってはハッピーメールだったのかなぁ……）
「これから、何処行こうか？」
「う～んと……」
『ピピピ……ピピピ……』
「あ、メール。ちょっと待ってね」
真砂子はケータイを開いた。

『こちらは、ケータイ・ダイエット事務局です』
『この度、当方の手違いにより登録解除になった事、深くお詫び申

し上げます』
『つきましては本日、再登録を完了致しましたので、今まで通りのご利用をお願い申し上げます』

『相川真砂子　様』

――完――

（後書き）

当初は真砂子がクリックを忘れて死んでしまう恐怖の話として考えたんですが、それではありきたりすぎで予測されてしまうと思い、このような結末を考えました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2635e/

ケータイ・ダイエット

2010年10月8日15時27分発行